

父の書齋 浜林正夫

緑町の官舎の玄関に入って、すぐ右隣が父の書齋でした。ここに本棚が6つおいてありましたが、そのうち3つは床の間におかれ、そのまえにオックスフォード英語辞典がならんでいました。

この部屋には、はじめはテーブルがおいてあり、そこで外人教師たちとよくトランプをしていましたが、いつごろから大きな机をおき、そこに和服を着て正座して仕事をするようになりました。机の上は整然と片付けられていて、読みかけの本以外はほとんど何も置いてありませんでした。ノートをとったようすもありません。それでよく、引用の多い『英語の背景』のような本が書けたものだと、いまになって不思議に思っています。

本を読みながら、ノートはとらずに青鉛筆で線を引いていました。それだけで頭に入ってしまったのでしょうか。私などは、自分でとったノートの中身も忘れてしまって、何度もノートをひっくり返さないと論文ひとつ書けないので、原稿を書きながら身の周りに、本やノートの山ができます。その山の高さを見て「そろそろ論文が仕上がりそうね」と妻にからかわれたものです。父はどうやってあれで本が書けたのか、その秘訣を生前に聞いておけばよかったと悔やんでいます。



浜林 正夫
(はまばやし・まさお)
生之助次男
本学元教授・一橋大学名誉教授

辺龍聖の命を受けた苦米地英俊が、中等教育界からやっと見つけ出したのが浜林であった。

着任した頃の浜林は坊主刈りの素朴な風貌で、物静かに話す暗い感じの教師であつたらしい。当時、彼は四寮（玉の井寮）の寮監をしていた。浜林一家の住む官舎はこの寮と渡り廊下で繋がっていて、寮の二階の寮監室にはたくさんの本や辞書が備えられていた。浜林はこの部屋で夜遅くまで勉強し、たくさんの本を書いた。着任の頃から昭和2年（1927年）に英国へ留学するまでの間は、彼が生涯で最も精力的に著作活動を行った時期である。その活動の中心は英文学作品の訳注であった。T. ハーディ、J. ゴールズワージー、H. G. ウェルズなどは彼が好んで取り上げた作家である。また、『英文構成法』という英作文の参考書を著したり、英国人の同僚ラウンズと共著で『英語会話の実際』を著すなど、その著作は「読む」・「書く」・「話す」のいずれの方面にも及んでいる。彼の主な著書には、他に『盲人国』（研究社）『近代英文学叢書（全10篇）』（健文社）『ハーディ短篇選集講義』（健文社）『英国文学巡礼』（健文社）『英語の背景』（北条書店）などがある。

浜林生之助略年譜

- | | |
|----------|-----------------------------|
| 明治20年 8月 | 三重県多気郡東黒部村乙部（現松阪市乙部町）に生まれる。 |
| 明治37年 4月 | 三重県師範学校に入学。 |
| 明治41年 4月 | 広島高等師範学校に入学。 |
| 明治45年 4月 | 鹿児島県立川内中学校に奉職。 |
| 大正 4年 8月 | この頃から『英語研究』に寄稿。 |
| 大正 5年12月 | 岡田一枝と結婚。 |
| 大正 8年 4月 | 福島県立福島中学校へ転任。 |
| 大正 9年 3月 | 小樽高等商業学校教授に就任。 |
| 大正13年11月 | 『近代英文学叢書』（全10巻）を順次出版する。 |
| 昭和 2年 5月 | 文部省在外研究員として英国へ出発。 |
| 昭和 4年 8月 | 帰国。 |
| 昭和 5年10月 | 『英国文学巡礼』（健文社刊）出版。 |
| 昭和 6年 3月 | 肋膜炎を患う。 |
| 昭和 8年 4月 | この頃からラジオの英語講座を担当。 |
| 昭和10年 7月 | 生徒主事に任じられる。 |
| 昭和16年 9月 | 教導部長に任じられる。 |
| 昭和20年10月 | 進駐軍の通訳に駆り出され道内各地を回る。 |
| 昭和21年 3月 | 苦米地校長の辞任に伴い、学校長事務取扱を命じられる。 |
| 昭和22年 3月 | 結核が再発。病床につく。 |
| 11月 | 永眠。 |
| 昭和23年 2月 | 『英語の背景』（北条書店刊）出版。 |



代表的著作「英語の背景」と「英国文学巡礼」